特集用・宮崎汎会員が見た世界

第１部・映画編・第３話・ペペルモコ「望郷」とカスバの女のアルジェ

打ち合わせが済んで銀座のとあるバーに入った。酒の勢いもあって話が盛りあがり、今回の欧州出張は週末に仕事が終わるので、いっそ休暇を取ってどこかへ寄ってから帰国しようとなった。

客がカラオケで「カスバの女」を歌っている。ここは地の果てアルジェリアどうせカスバの夜に咲く・・・・情感のこもったいい声で思わず聴き入った。

そうだアルジェリアはどうだと誰かが言った、それからジャンギャバン主演の映画「望郷」を見たか？あれは名画だったねといった話題でひとしきり座がにぎわった。

日本でも海外旅行への関心が高まりはじめ、ガイドブックなども出始めたが、今から見るとかなり大まかな旅行案内書であった。当時は地の果てアルジェリアなどは、まだまだ観光の対象国とはなっておらず、ガイドブックはどこの本屋にもまったく見当たらなかった。苦労しながらＪＥＴＲＯや航空会社の伝手をたどり断片的な情報を得るのがやっとだった。

首都アルジェに到着した。頭の中は映画「望郷」の場面と、エト邦江の歌った「カスバの女」のイメージだけで、あとは何も思い浮かばない。アルジェは海を囲い込むような、なだらかな丘の連なりに白い建物がびっしりと並ぶ美しい街並みである。丘の頂にある堂々たるホテルオラッシーは国の威信をかけた巨大な建物で、ホテルのテラスから見るアルジェの海は真っ青でカミュが述べているように美しすぎる海である。

アルジェの海は青く美しく輝

地図も手に入らない、言葉も判らない私たち異邦人は、ただ自分の足で闇雲に歩きまわる以外手立てはない。どこをさまよい歩いても丘の頂にあるホテルオラッシーは目に入る存在だ、迷ったらホテルを目指せばいい。

望郷の舞台を思い浮かべつつまず港へ行く。急坂を下り海に出た。

映画のラストシーンで客船がボーッと出港の合図の汽笛を鳴らす。この時ジャンギャバンが鉄柵につかまって恋する女性の名を呼ぶ「ギャッピー・・・」と絶叫するあのシーンだ。その鉄柵につかまってみた。

望郷の舞台ホテルアレッティ

海辺近く白い建物が連なりまぶしい街並みが続く、だが国威発揚なのだろうか文字は全てアラビア文字でしか表記してない。フランス語表示は全て塗りつぶされ、アラビア文字に書き換えられている。ホテルらしい白い建物の前に出た。薄暗いロビーへ入り込んだ。小さなフロントの不愛想な係に身振り手まねで、このホテルのパンフレットが欲しいというと粗末なパンフを手渡

してくれた。英語表記で「ＨＯＴＥＬ・Ａｌｅｔｔｉ」とある。ここが映画の舞台のホテルかと、しばしロビーにたたずみ改めて望郷のストーリを追想した。

カスバへの入口

カスバの意味も分からず、けだるいエト邦江の歌に惹かれてやってきたアルジェリアである。そのカスバを探そうと随分歩いた。道行く人を誰かれなくつかまえカスバ、カスバと問いかけながら人々が指さす方向に歩き、遂に広い道路からカスバへの入口とおぼしき狭い路地にたどり着いた。

日のさえぎられた狭い坂道を登るにつれ、人も多くなり路地は入り組みまるで別世界、カオスの世界に迷い込んだような心地がする。たむろする人々の視線が気になる、鋭い目つきで場違いな奴が来たと見つめられている不安を感じ始めた。

カスバとは城塞の意味だと後から知った。ギャバンが追手からのがれ逃げまどったここアルジェのカスバは狭く入り組み、いったん匿われたらおいそれとは見つからない迷宮の趣である。

不意に小柄な男に肩をたたかれ、カスバは危ないからここから出た方がいいと英語で忠告を受けた。そしてこの男に連れられ広い明るい道路まで戻った、今一瞬垣間見てきたカスバはなんだか白昼夢の中の出来事であったかのような気がして、ホッと大きな溜息が出た。

左の絵画は、帰国して上野の国立西洋美術館を訪れたとき、松方コレクションの中に、ルノワールの描いた「アルジェリア風のパリの女たち」があることを知り、アルジェのカスバと重ね合わせつい絵葉書を買い求めたものである。　　（１９８１年）